

深夜の高層ビル街。
その内一つのビルの屋上に二人の女性が夜風に髪を揺らしながら、佇んでいた。
一人目の女性の名は、藤丸 立香。
濃いオレンジ色の癖のあるセミショートヘアで、アホ毛があり、本人から見て左側の髪を一房、シュシュで結んでいる。
目は大きくクリクリとしていて、瞳は茶色。
ボディラインにピッチリとフィットしたコスチュームは胸元が少しばかり開かれ、白とオレンジを基調とされている。
また、首や肩、胸上、脚と上半身を繋ぐ関節部分、内ももに沿うように黒いラインが引いてあり、胸下を黒いベルトのようなもので固定されている。

「どう？ モードレット。中の様子は」

ビル群の中で、ひときわ高く聳え立った摩天楼をにらみながら、立香は隣にいる、薄い金髪を後ろで赤いシュシュを使って軽くまとめている、ポニーテールにしている女性に声をかける。

「どうにもおかしいぜ、マスター。護衛の数が多いばかりで、肝心のターゲットがいやしねえ」

同僚の問いに答えた女性は、眉をひそめる。
彼女の名は、モードレッド。
獰猛な獣を思わせる吊り上がった目と中性的な顔たち。
立香に比べて体つきは貧相で、着ているコスチュームも立香とは反対で露出の多いもので胸上と肩、そして胸下からへそにかけて、その健康的な肌色の肌を露出させている。
右手には鍔が広く、剣身ががっしりとした大剣を持っている。
闇の存在、魑魅魍魎が跋扈する近未来日本で、人魔結託した犯罪組織、企業が暗躍し、混沌とした時代。
その中で正道を歩まんとする人々は、人の身で魔に抵抗できる“忍びのもの”たちからなる集団を組織し、人魔外道の悪に抵抗した。
人は彼らを“対魔忍”と呼んだ。
そして彼女ら二人こそが、対魔忍であり、今現在、とある任務を遂行中なのである。
その任務内容は裏社会の連中を制圧し、情報を得ること。
二人はビルの屋上で突入する機会をうかがっている。

「いや、待て。会合が始まった。突入するぜッ！ マスター！」
「了解」

立香はモードレッドに後ろから抱きつく。
それを確認したモードレッドは大きく跳んだ。
ビルをも超える常識外れな高さまで跳び、重力に従いながらも飛翔し、目的のビルの、全面ガラス張りの一室へと飛び込んだ。
ガラスの割れる大きな音と共に会合の中にいる護衛達が会合を行っている者たちの周辺に集まる。
モードレッドは会議を行っていた場所より一つ下の段に着地した。
立香はガラスに突撃する前に空中でモードレッドから離れ、一緒に突入したため、モードレッドの隣にいる。

「オラァッ！ モードレッド様と登場だぜッ！」
「対魔忍です！ 全員動かないでください！」

モードレッドは威嚇するために、立香は忠告するために声を張り上げる。

「た、対魔忍だッ！！ 殺せえッ！！」

護衛達は持っていた銃を二人に向ける。

「遅え！」

その一言を告げた瞬間にモードレッドは複数人の護衛の前に跳躍する。
手に持った大剣は赤い雷のようなものを発している。
モードレッドは持ってた大剣を横に一閃。
大量の血が床に飛び散る。

「うっ、撃てえ！ 撃てえッ！」

護衛達は殺された仲間に目を向けずに、銃を乱射する。
が、銃口には細身のクナイが刺さっており、銃弾が出ない。

「撃たせないよ」

クナイの持ち主である立香はそう静かに告げる。
両手の指の間にクナイを挟んであり、それを一気に投擲する。

「ぐへあ！」
「があッ！」

クナイはまるで吸い込まれるように護衛達に眉間に刺さり、その命を刈り取っていく。

「グオオオオオオオオオッ！！」

護衛の掃討が終わると同時に、一つしかない出入口を打ち破って、わらわらと虎や熊、狼やイノシシなどの動物と人の入り混じった獣人の群れが乱入してくる。

「へっ。少しは骨のあるヤツが来たみたいだな」

モードレッドは大剣を斜めに一振りし、大剣についた血を払い、獣人の群れに突っ込んだ。

「どうしたッ！ どうしたッ！」

縦横無尽に赤い電撃を纏った大剣を振り回し、次から次へとモードレッドは獣人を殺していく。

「はっ！ ふっ！」

立香も負けてはいない。
どこからともなくクナイを取り出し、次から次へと投擲していく。
段々と獣人は倒れ伏していき、最後の一人も……。

「Take That, You Fiend！」

モードレッドが大剣をぶん投げ、獣人に突き刺さると、それと同時にモードレッドが跳び、膝でさらに大剣を押し込む。
そして、縦に一閃、返しの一閃で獣人の身体は縦に真っ二つに切り別れた。

「よーしッ！ いっちょ上がり」
「これで全員かな」

護衛を全て倒しきった二人は生き残った中年男の傍に行く。

「民新党幹事長、矢崎宗一さんですね」

立香が男に問いかける。

「そうだ矢崎宗一だ。おれはお前たちを知っているぞ」

矢崎は怯えがない傲慢な態度で立香の問いに応じる。
まるで自分が殺されるはずがないという確信があるようだった。

「はぁ。どう見たって外道だな、コイツ」

モードレッドが矢崎をそう評する。
人を害する組織との会合に出席する男だ。
経歴を知らない人でも分かる話だった。

「どうするんだ、マスター。殺すか？」
「ひいっ！」

凄まじい殺気と冷たい瞳、大剣の切っ先が矢崎に死を意識させる。
強ばった顔からは恐怖に染まった表情が見える。

「ターゲットじゃないから殺しはダメかな。警察につきだそう」
「いいのか、マスター。今、殺すのは簡単だぜ？」

会合に出席していた時点で矢崎は黒。
しかし、任務に関係のないものを殺すのはいささか問題がある。
それが分かっているのか、モードレッドの口調は軽く、冗談のようだった。

「や、止めろッ！正気か、貴様。俺は政権与党の幹事長だぞ。そんなことをすればタダで
はすまんぞッ！！」

しかし、矢崎には冗談には聞こえていなかった。
益々怯え、逆に脅してくる始末だ。

「貴方の悪行は個人的には見逃せるものではありません。でも、貴方は今回のターゲット
ではないので、警察に突き出します」

そう、立香が言うと、矢崎はほっとしたように息をつく。

「それでも貴方は犯罪者です。いつか然るべき罰が下るでしょう」

立香は毅然とした、鋭い瞳を矢崎に向ける。
その瞳に少しは動揺した矢崎だが、殺されないと分かったからか、先ほどまでとは一転し
て態度を変える。

「この俺をコケにしてタダですむと思うなよ！俺の一声でお前らなどどうにでもなる！
！」

声を大にして、滑らかな口調で、二人に怒鳴る。

「必ず地獄を見せてやるぶべえええええッ！！！！？」
「うるせえぞ。いい加減黙れ」

モードレッドが蹴り上げた足が矢崎の顎にヒットし、矢崎は身体を宙に浮かせ、もんどり
うつ。

「ちょ、モードレッド！？」
「これくらいはいいだろ？外道にはいい薬になる」

焦る立香に対し、モードレッドは冷静だ。
もし、モードレッドが手加減をしていなければ、矢崎の頭は吹っ飛んでいただろう。
モードレッドは吹っ飛んだ矢崎の元に向かう。

「いいか、オッサン。オレは外道が嫌いなんだ。だが、マスターが殺すなと言ったから殺さないだけだ。もし何かちょっかいかけてみろ。オレがお前を殺してやる」
「このおッ、小娘どもがああああ！！」

矢崎はモードレッドの脅しに恐怖を感じたが、それよりの怒りの方が大きく、怒りに身を任せてモードレッドに怒鳴った。

「だから黙れって」

起き上がろうとする矢崎の鳩尾に、モードレッドは大剣の柄頭で一突きする。
矢崎は泡を吹いて失神する。

「これで静かになった。どうする、マスター？帰るか？」
「はあ。そうだね、帰ろうか」

立香は来た時と同じようにモードレッドに抱き着くと、モードレッドは暗闇の夜空へと飛び出した。
一室に大量の死体と失神した矢崎だけを残して。

数日後。
山深いにある地方都市の施設。
そこには立香とモードレッドの姿があった。
そこは闇の勢力拡大に危機感を募らせた政府が密かに作り上げた隠れ里だ。
その隠れ里には優秀な対魔忍を早期養成するための学園や生活するための商店のほかに、
特務機関の施設が設けられている。
学園は五車学園といい対魔忍養成機関であるが、二人が所属しているのはフィニス・カルデアという特務機関の方だった。
二人はいくつもの任務をこなしてきた対魔忍であり、数日前の任務の報告を行っている最中だった。

「失礼します」

立香はモードレッドを伴い、特務機関の長がいる部屋へと入室する。

「お帰り、二人とも」

部屋の中には手前の方には応接するためのソファと机、そして奥の方には執務机があり、そこには一人の美女が椅子に座っていた。
彼女の名前はダ・ヴィンチ。
彼女こそが特務機関フィニス・カルデアの長だ。
数々の作戦を指揮し、多くの闇の者たちを葬ってきた。

「ただいまー、ダ・ヴィンチちゃん」

二人からしたら目上の人物であるにも関わらず、親し気な態度でダ・ヴィンチと会話をする。

「おい、どうしてあの矢崎って男はターゲットに入ってなかったんだ？」

モードレッドは挨拶抜きに単刀直入にダ・ヴィンチに質問をする。
その質問の内容は立香にとっても気になることだった。

「さっそくかい。まあ、いいけどね」

ニコニコと笑みを浮かべていたその表情をスッと真面目な表情に変える。

「矢崎宗一は実に興味深い情報をもっていることが分かってね。それでターゲットには含めていなかったんだ」

「その情報は？」

「まあ、待ちたまえ。矢崎は人身売買組織と懇意でね。後置所にいる矢崎をコッソリ尋問したら、地下都市ヨミハラの娼館で、元対魔忍の娼婦を見た、というんだ」

「それって……！？」

立香の目が見開かれる。

「そう」

ダ・ヴィンチは静かに告げる。

「その娼婦は頼光って呼ばれていたそうだよ。容姿や年齢も彼女のデータと一致した」

「お母さんが……ヨミハラに」

立香が呆然と呟く。

源頼光は立香の義理の母だ。

小さいころに家族を亡くした立香は偶然施設にいた頼光によって引き取られた。

実際は偶然などではなく、ある記憶に関係している。

実はカルデアに所属している人達にはある共通点がある。

それは前世の記憶を持っていることだ。

記憶の中で立香は様々な人物を率いて世界を救っており、その人物が頼光であり、モードレッドである。

頼光は立香を引き取り、自分の子供のように大切に育てた。

立香も仲間ではなく、母として頼光を慕い、二人の親子は幸せに過ごしていた。

しかし、優秀な対魔忍であった頼光は、5年前、任務の途中で消息を絶ち、懸命な捜索にも関わらず、その行方はようとして知れなかった。

「我々は仲間は見捨てない。今、所在確認と救出のため、ヨミハラへの潜入作戦を立てているんだ」

「行かせてッ！ダ・ヴィンチちゃん！」

ズイッと立香はダ・ヴィンチに近づき、執務机に手をついて、前のめりにダ・ヴィンチに顔を近づける。

「そう言うと思ってたよ。でも、落ち着いて聞いてくれ。ヨミハラは淫虐の魔界都市、そこにいる女性は、全て奴隷か娼婦かだ。この意味が分かるね」

「勿論分かっている。潜入するなら奴隷や娼婦にならずにちゃいけないんだよね」

「そうだ。君の気持は十分理解している。でも、この任務だけは行かせられない。頼光もここにいたら反対するだろう」

ダ・ヴィンチは真面目な表情から今度は優しい笑みを浮かべる。

「こういう任務になれた対魔忍に任せればいいさ。君一人が背負わなくていいんだ。君は別の任務に向かってほしい」

「ううん。私にやらせて」

「立香ちゃん」

ダ・ヴィンチは覚悟を決めた、強い瞳を見せる立香を説得しようとする。

しかし、それよりも先に立香がダ・ヴィンチに言う。

「私はもう、前みたいに後ろから指示して、守られる存在じゃない。私は一人前の対魔忍だよ。私は戦える」

「確かに君は前のように守られる存在じゃない。ほかの者に引けを取らない戦闘能力もある。しかし、本当に分かっているのかい？ 奴隷や娼婦に人権はない」
「うん。知らない男の人に処女をやるのは嫌だけど、それは覚悟してる。身体だって改造されるかもね。でも、ダ・ヴィンチちゃんなら元に戻してくれるでしょ？」
「ああ。戻してやれるとも。でも、君が行かなくてもいいじゃないか」
「私はあの人の娘だから。マスターとサーヴァントの関係じゃない。娘なら母親を救いたいでしょ？ お願い、ダ・ヴィンチちゃん」

立香がダ・ヴィンチに深々と頭を下げる。

「はぁ」

ダ・ヴィンチは説得を諦め、ため息をつく。
一度覚悟を決めた立香が折れないことは知っていたことだ。

「……分かった。君に任せる」
「ありがとう。モードレッド」

立香はモードレッドがいる方に身体を向ける。

「この任務は私一人で行くよ。こんな任務にモードレッドがいく必要はないよ」
「馬鹿」
「あいたあッ！」

モードレッドが立香の頭に拳骨を落とす。
その顔には少しの怒りが浮かんでいる。

「オレはお前の相棒だ。お前の行くところにオレも行く。奴隷？ 娼婦？ 上等じゃねか。隙を見て中からぶっ壊してやるよ」

と、モードレッドは自信満々に言い、獰猛な笑顔を見せる。

「本当にいいの？」
「何度も言わせんな」
「ありがとうっ！」

立香がモードレッドに抱き着き、モードレッドは立香の頭を優しくなでる。

「一緒に救出するぜ、マスター」
「うん」

そうして二人は魔界都市ヨミハラへの潜入準備をするのであった。

対魔忍は闇の者にとっては天敵と言っても過言ではない。
闇の者しかいないヨミハラへの潜入には同じ闇の者の協力者が必要だった。
そこで選ばれたのは奴隷商人ゾクト。
浅黒い肌に尖った耳をした中年太りの小男で、左目はつぶれ、眼帯をしていた。
ゾクトは肌の色や尖った耳で想像がつくとは思うが、魔界の住人で、魔族と呼ばれる種族の下層貧民だ。
人間や魔界の住人関係なく、需要ある知的種族を狩出し、売りさばくことを生業としている。
ゾクトはその奴隷商人という職業により、別の対魔忍によって捕らわれていたところ、任

務に協力する代わりに無罪放免にする契約を交わしている。
今回の任務の目的は頼光の生存を確認し、救出することだ。
立香とモードレッドは奴隷商人ゾクトに捕らわれた哀れな奴隷としてヨミハラに潜入。
ゾクトによってヨミハラの娼館に売られ、以後は娼婦に扮しながら捜査するという段取りだ。
さらにゾクトにはカルデアとの連絡役も任されている。
ゾクトに案内され、ヨミハラへの道中、ゾクトが二人に話しかけてくる。

「そろそろ拘束されてもらいますぜ」
「拘束？」
「これからヨミハラで売りさばこうっていう奴隷が何の拘束もなく歩いていちゃおかしい
と思いませんか？」
「確かに」

立香はゾクトにそう説得され、納得する。
確かに奴隷が自由に動き回るのは、いかに奴隷を見たことのない立香でもおかしいと思う
だろう。

「で、その道具で拘束すんのか？」
「そうであ」

モードレッドが油断なくゾクトを見る。

「マスター。奴隷商人は狡猾だ。むやみに信じるな」

モードレッドがゾクトが手に持っている目隠し、ボールギャグ、首輪、拘束具を奪い、よく観察する。

「おい。この目隠しに魔術の痕跡があるな。どんな効果なんだ」
「へ、へえ。それは使用者に自由に目隠しをされた状態でも周りが見えるようになるもん
でさあ」
「ふーん。ギャグボールには何もないな」

ゾクトは表情に出さず、内心ほっとする。
何せ、ボールギャグには一つの仕掛けがあるからだ。
このボールギャグからは一時間おきに筋力を低下させる薬剤が分泌される。
これは魔術等を使ったものではなく、製造技術で作り出された機能であり、モードレッド
には見抜くことができなかった。

「首輪も特になしか。拘束具は……、強度があるな。これはどれくらいの強度があるん
だ？」
「それはオーガが三人がかりでも引きちぎることができない強度がありますぜ」
「成程な。目隠しは常に周りを見させるようにしろ。いいな」
「へえ」

ゾクトにそう命令すると、モードレッドは拘束するようにゾクトを促す。
そして二人は拘束される。
両目は目隠し、口にはボールギャグ、首には首輪を装着される。
両手は後ろ手に縛りあげられ、首輪から伸びた鎖はゾクトが握っている。

「んむうう……う、うう」
「むう……うっくう……」

二人はゾクトに連れられ、ヨミハラに向かい、ヨミハラについたのは翌日の夜だった。

「むぐうう……うううう……」
「んううう……ふううう……」

拘束されて丸一日以上経ち、まともに呼吸をすることを妨げられていたからか、流石の二人の顔に疲労の色が見える。
自分たちの身体が筋力低下の薬物に蝕まれ始めていることにも気づいた。

（クソ！魔術じゃない、別の仕掛けがあったのか！）
（力が……）

モードレッドは後悔しているが、時すでに遅く、どんどん筋力が低下していく。
そして三人は目的の娼館にたどり着いた。
その娼婦の名前はアンダーエデン。
魔界の技術によって改造、訓練された奴隷娼婦と呼ばれる特別な娼婦が働く娼館である。
主の名前はリアル。
娼館の支配者という顔以外に地下都市ヨミハラを支配する組織ノマドと太いパイプを持つ有力者でもあった。
一行は厳重な身体検査をされた後、リアルの部屋に案内された。

「やあ、ゾクト。久しぶりだな」

大柄のでっぷりとした中年オヤジが言った。
彼がリアルだ。
にこやかな笑みを浮かべているが、その目は少しも笑っていない。

「これはリアルの旦那、ご無沙汰しておりますて申し訳ねえです」
「この対魔忍のメスどもが、カルデアの中でも特に実力の高い、立香とモードレッドか。
この手強い対魔忍二人をよく捕らえたものだ」
「そりゃあもう、あの手この手で……。こいつらを捕まえるのに随分コストがかかったもので……へへ」

ゾクトは常に平身低頭だった。

「まあ、少し高い気もするが有力な対魔忍にメスとあらば仕方なだろう」
「流石旦那！助かりやす！」

ゾクトとリアルは立香とモードレッドの売買について離し始めた。
あらかじめ売買の条件について交渉していたらしく、とんとん拍子に話が進んでいく。

「奴隷娼婦の売買には奴隷娼婦候補の、この女たちの承認もいる。拘束を解いてやれ」
「え？」

リアルの言葉が以外だったのか、ゾクトは驚いた顔をする。

「いいのですか？武器はありませんが、こいつらは協力な対魔忍ですぜ」
「ああ、分かってる。だが、その拘束具は魔界の品であろう？ならば、そのボールギャグの効果は知っている。立っているのがやっとなほど筋力が減衰しているだろう。拘束を解くのだ。奴隷娼婦とは直に契約するのがルールだ」
「流石リアルの旦那。そこまでご存じでやしたか」

ゾクトは言われた通りに立香とモードレッドの拘束を解いた。

「ふう、やっとまともに息ができる」
「あー、肩痛えな」

二人はボールギャグから分泌された薬の影響はあるが、立つことも困難というほどではなかった。
手足が自由になった途端に襲い掛かる……。なんてことはするつもりがなかった。
目的は娼婦として潜入するためだ。

「ほお。並みの人間ならまともに立つこともできんはずだが。立香、モードレッド。俺は

リアル、上手くいけばお前たちの主人となる男だ」
「上手くいけば？」
「どういう意味だ？オレ達が娼婦になるのはもう決まってんじゃねえのか」
「ヨミハラにはヨミハラのルールというものがある」

リアルは二人に羊皮紙をそれぞれ差し出した。
羊皮紙には魔界の文字が刻まれている。

「これは契約書だ」
「契約書？」
「お前たちは奴隷娼婦になるのだ。奴隷娼婦とは、そうだな、魔界の高級娼婦だと思ってくれ」

二人は奴隷娼婦という言葉も気になるが、それよりも契約というのが一番気になった。
もし、機密を話せと契約書に書いてあれば、話さざるを得ない。
魔界の物なのでおそらく契約に従わなければ、最悪、死ということもあり得る。

「心配するな。機密を話せなどは書かれていない。ここに書いてあるのは奴隷娼婦になるかならないか。そしてお前たちが大金を稼いでくれれば自由にするという内容だ。どうだ？悪くない話だろう」

契約の内容は分かった。
次に気なるのは奴隷娼婦だ。
ただの奴隷、ただの娼婦とは何が違う。

「リアルの旦那、こいつらに俺から説明してっても構いやせんかね」
「好きしろ」

リアルは抑揚に頷く。
ゾクトは二人に近づくと耳元でささやいた。

「この契約書のサインすれば、全てOKでさあ」
「おい、奴隷娼婦ってのはなんだ？」
「そんな話聞いてないよ？」
「まあまあ、俺を信じなよ。ただの娼婦になったところでこの町を自由に動き回るなんて無理な話だ」

リアルは真剣な顔つきで話す。

「しかし奴隷娼婦は違う。奴隷娼婦はいわばこの町の支配者たちの情婦になるのも同じことだ」
「はあ？」
「どういうこと？」
「奴隷娼婦になれば自由にこの町を歩くことができるんだ。その上、リアルの旦那の看板があれば、あんたらの目的を果たすにはいろいろ役立つと思うぜ」
「……仕方ないかな」
「マスター？」
「お母さんを助けるためだ。覚悟はしてた。契約しよう」
「……そうだな。契約するか。だが、契約の詳細は聞かせてもらおうぜ」

立香とモードレッドは悠然とした態度でリアルに告げる。

「よろしい」

リアルは頷くと契約に関する説明を始めた。
奴隷娼婦は高度な性サービスを行うため文字通りのどれでは務まらず、高いプロ意識が必要なため自らの強い意志が必要となる。
だからこそ、奴隷娼婦には高い報酬が設定されている。

奴隷娼婦を二年間勤めればその身分から解放され、奴隷商人などに支払われた額をひいた二年間分の報酬が支払われる。
契約は魔界の契約方式で行われる。
契約が完了すると、二人は魔界の医療技術によって作り出されたカプセルを飲む。
これは機械と魔物の細胞で作られたキメラ微生物と呼ばれるナノマシンのようなものが含まれ、契約発動の証としてまず二人の身体に奴隷娼婦の刻印が刻まれる。
その刻印は身分を表すためだけでなく、逃亡など契約に反する行動を防ぐものである。
娼館から一キロ以上離れれば、キメラ微生物が活動を始め、血液と混ざり合い、爆発する特殊な毒素を分泌し、両手両足が四散する。

「うっっ」
「つうう」

二人の舌が突然熱くなり、苦悶の声を上げる。

「奴隷の刻印が刻まれたのだ。お互いの舌を見てもろ」

立香とモードレッドはお互いに舌を見せ合う。
確かに舌には幾何学模様の刻印が刻まれていた。
その後、ゾクトは二人を売った金をもらいにいそいそと部屋を出ていった。

「さて、お前たちにはこれから奴隷娼婦になるために訓練を受けてもらう」
「どんな訓練ですか？リアルさん」
「マスター……」

立香は普通に質問をする。
もう奴隷娼婦として働くことを決めたのだ。
郷に入っては郷に従え。
立香は奴隷娼婦として働くことに後悔はなく、あるのは頼光を救うことだけ。
もう、覚悟は決めているのだ。
対するモードレッドは立香の態度に少し呆れている。
前世、いや生前戦場に立ち、様々な経験をしてきたモードレッドは奴隷や娼婦の姿を見ても、その経験はなかった。
さしものモードレッドの中も少しの不安がある。
しかし、立香は全く不安がないように見える。
女として扱われるのを嫌い、男として扱われるのも嫌うモードレッド。
女を捨てたわけではない。
だからこそ、知らぬ男に触れられるのも嫌だし、身体を弄繰り回されるのも嫌だ。
それは立香も同じはずなのに、いつもの立香と変わりがない。
それは覚悟を決めているから。
まだまだ覚悟が足りなかったか。
モードレッドは密かに立香を尊敬する。

（本当に覚悟を決めたんだな。オレも腹を括らねえとな）

モードレッドは改めて覚悟を決めた。
立香と共に耐え抜き、この娼館から脱出する覚悟を。

「奴隷娼婦は性サービスの究極のプロだ。それに見合うスキルを身に着けるための訓練をやる。最高のメス豚になるためのな。それと俺のことはご主人様と呼べ。呼んでみろ」
「ご主人様」
「ご、ご主人様」

立香は滑らかに、モードレッドはどもりながらリアルのことをご主人様と呼ぶ。

「いいだろう。では話の続きだ。訓練と言ってもな、昔ならいざ知らず今は魔界の最新技術ですぐに習得できるようになっている。SEXあるいはそれに準ずる性行為を快楽、市場の悦びとして感じるように改造してやる。奴隷主婦となるための最大の障害は理性だ。お

前たちを改造して、その理性を壊す。快樂こそが至上の価値と思うようにするわけだ」
リアルはぞっとするような笑みを浮かべる。

「へー」
「成程なあ」

二人は分かっているのか、生返事を返す。

「あまり分かっていないようだな。まあ、実際に改造を受ければ嫌でも分かることだ」

リアルは壁に掛けてある時計を確認する。

「今日はもう遅いな。明日から改造を始める」

リアルはそう言うと部屋の外に行き、入れ違いにリアルの部下が二人を寝るための部屋へ案内する。
こうして、二人は潜入を成功させた。
それが地獄への片道切符だと知らず……。